クラス	TU109	担当教員	吉田　文久（ヨシダ　ノリヒサ）

テーマ	**体育の授業づくり・授業分析の検討** ～「体育は何を教える教科か」という問いに答えて～
著書･論文 研究課題等	(1)「体育における教科内容研究－とび箱の教具的価値についての検討をもとにして－」、名古屋短期大学研究紀要、Vol.34、1996 年 (2)「球技の学習内容」、『体育科教育学の探究』所収、大修館書店、1997 年 (3)「『五体不満足』から体育の可能性を読む」、体育科教育、大修館書店、Vol.42, No.12、1999 年 (4)「オフサイドのルールはなぜでき、バレーボールはなぜラリーポイント制なのですか」、体育科教育、大修館書店、Vol.50, No.15、2002 年 (5)「解説」、『中村敏雄著作集 第 8 巻－フットボールの文化論－』、創文企画、2009 年 (6) 『フットボールの原点－サッカー、ラグビーのおもしろさの根源を探る－』、創文企画、2013 年（12 月出版予定）

ゼ ミ ナ ー ル 概 要

キーワード：授業づくり、教科内容、スポーツ文化、教材研究、卒業研究

【 目的、内容、方法等 】

「体育」が教科として位置づき、それも小中高で必修科目とされていることを当たり前として受け止めてきましたが、改めて「体育は何を教える教科か」と問われるとそれに明確に答えることのできる教師はどれだけいるでしょうか。子どもは運動することが好きだから（実はみんながそうではないのですが）ということを理由に、特に教材研究や指導の工夫もなく、ただ運動やスポーツをやらせるだけの体育の授業がどれだけ多く実践されているかは皆さんがこれまでの受けてきた授業を振り返ればわかることだと思います。「体育」だからこそ教えることができる内容、子どもたちに味わわせることができる世界を理解し、それに基づいた体育指導を教師が行う、そのための授業づくりに真剣に取り組まなければ、体育の存立意義は失われていくと考えます。このゼミでは、まずこれまで各自が受けてきた体育の授業を振り返り、それを交流しながら、体育の授業の現実を受け止めます。その上で、いくつかの立場から優れた体育実践と言われる実践に触れ、それらを批判的に分析し、そこから体育の授業づくりの理論と実践のあり方について集団的検討を行います。できれば現場の先生を招き、直接話を聞くことやこちらから授業見学に出かけていきたいと思っています。また、現場教師が集ういくつかの研究会へも積極的に参加したいと思います。それと併せて学外でのゼミ合宿も予定しています。

ただし、健常児の体育指導だけが対象ではなく、特別支援学級、特別支援学校における体育指導、また地域のアダプテッド・スポーツ（障害者スポーツ）の指導について勉強をしたい学生も受け入れます。

【 授業計画 】

具体的なゼミの活動計画づくりは学生たちと相談して決定したいと思いますが、ゼミの学生たちには、以下のような活動に取り組んでもらおうと思っています。

(1) 自分の経験を文章にまとめ、発表する。できればゼミ外の学生の経験も調査する。
(2) 体育雑誌を中心に優れた実践(少ないが失敗の実践も)として紹介されている実践を探し、報告する。
(3) それと平行して、体育の授業づくりを検討する上で、基本的な視点を提供してくれる文献(下記のテキスト他)を分担してレポートする（ゼミ内でプレゼンテーションを行う）。
(4) 教科内容－教材－学習成果(評価)の関係の理解に基づいて各実践の実践分析を行う。また実践者の教授行為や教授方法の工夫なども議論する。加えて授業分析の意味とその方法についても学び、検討する。
(5) 体育の授業づくり・授業分析に関する各自の問題意識を膨らませ、卒業論文としてまとめ、報告する。
(6) 学生が独自に計画・立案した活動にゼミ全体で取り組む。

担当教員からのメッセージ

スポーツをして楽しむゼミでは決してありません。「体育」という教科の授業づくり・指導、あるいはスポーツのあり方についてまじめに考え、真剣に議論する学生の集団としてゼミ活動に取り組むと考えてください。ですから、スポーツが「できる・できない」、「うまい・へた」は全く問いませんし、そのこととは関係なく、ゼミ選択をしてください。

自分の意見を述べる機会を多くし、また人の意見を聞くことを学ぶゼミ運営をします。ですから、適当にお客さんで過ごそうと思う人には、苦痛の時間になります。それを承知しておいてください。

ねちっこい指導が待っています。